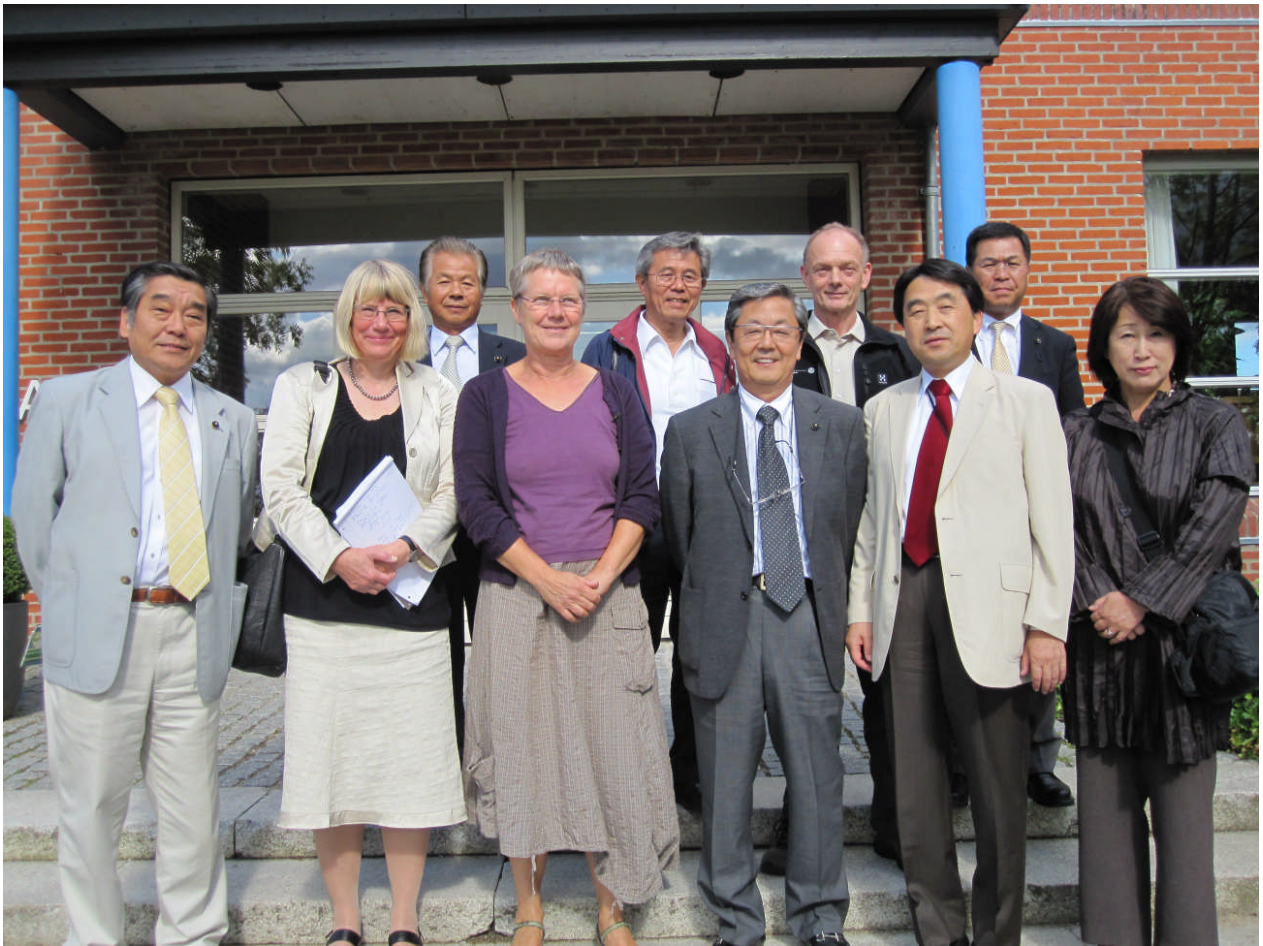


海外調査実施報告書

デンマークにおける、農業、福祉、教育の現状を視察

2010年8月27日～9月3日



林 大 記

蝦 名 清 悦

木 村 峰 行

佐々木 恵美子

北 準 一

北 口 雄 幸

海外調査実施報告書

2010.8.27-2010.9.3

視察先：デンマーク

1. 視察メンバー（6名）

団 長..... 林 大 記 民主党・道民連合 札幌市南区
 副団長..... 蝦 名 清 悦 民主党・道民連合 札幌市北区
 幹事長..... 木 村 峰 行 民主党・道民連合 旭川市
 副幹事長..... 佐々木 恵美子 民主党・道民連合 十勝管内
 事務局長..... 北 準 一 民主党・道民連合 空知管内
 事務局次長.. 北 口 雄 幸 民主党・道民連合 上川管内

2. 視察目的と意義

北海道は、厳しい経済環境を抜け出すことができず、道民の所得も他府県と比べ低下している。

平成 15 年に 31 位だった県民一人あたりの所得も平成 20 年には 39 位に後退するなど、所得の低下に歯止めがかかっていない。

一方、デンマーク国は、北海道とほぼ同じ人口規模で、面積は半分。しかし、一人あたりの総生産額はほぼ倍と言うことであり、ここに北海道が自立に向けたヒントがあるのではないかと視察先に決めた。

そして、農業や環境、高福祉といった政策などいずれも、様々な機会に得ることができる教育環境だと言うこともわかってきた。その教育についても現地の皆さんの声を聞きながら視察してきた。

3. 視察先（都市）

デンマーク王国

（コペンハーゲン、オーデンセ、オーフス、オッター、フォルム、ロンデ、オッデン）

4. 視察日程

平成 22 年 8 月 27 日（金）から 9 月 3 日（金）までの 8 日間

5. 視察国（デンマーク王国）と北海道の比較

（資料：道政トピックスより抜粋）

	デンマーク王国	北 海 道
面 積	43,094 平方メートル	83,456 平方メートル
人 口	543 万人（2007 年）	560 万人（2007 年）
労働力人口	288 万人（2004 年）	274 万人（2006 年）
主 要 産 業	農業、畜産業、科学工業、加工業	農林水産業、観光、サービス業
名目総生産	2,739 億ドル	1,167 億ドル
1 人当総生産	50,371 ドル	28,875 ドル

6. 視察行程表

日次	月日	都市名	行程・視察内容
1	8/27 (金)	新千歳-成田 旭川-成田	林、蝦名、佐々木、北 木村、北口 (成田泊)
2	8/28 (土)	成田空港 コペンハーゲン	飛行機で移動 (コペンハーゲン泊)
3	8/29 (日)	コペンハーゲン オーデンセ オーフス	<u>ミドルグロン風力発電所を視察</u> クリーンエネルギーの成功モデル・奨励策を視察。 オーデンセへ移動し、 <u>オーデンセ市内視察</u> オーフスへ移動。 (オーフス泊)
4	8/30 (月)	オーフス オッター フォーラム オーフス	<u>オーフス郊外のフォルケホイスコーレ (国民高等学校)、エグモント・フィスコレ視察。</u> 学校以外の課外教育・生涯教育推進制度について <u>オーフス大学リサーチセンター・フォーラム視察</u> <u>バイオ、改良などの農業技術研究をレクチャー</u> 簡単なオーフス市内視察 (オーフス泊)
5	8/31 (火)	オーフス ロンデ オーフス	<u>フォーレ農業指導サービス視察</u> (農産物流通、酪農家 へのサービスなどのレクチャー) <u>酪農場視察</u> (生産の流れ、システムを視察) <u>農業後継者教育に関してレクチャー</u> (オーフス泊)
6	9/1 (水)	オーフス コペンハーゲン	オッデンを經由しコペンハーゲンへ移動 <u>ベネット市にて高福祉・高負担の制度などを視察研 修、意見交換</u> コペンハーゲン市内視察 (コペンハーゲン泊)
7	9/2 (木)	コペンハーゲン	<u>コペンハーゲン学校評議会視察、意見交換</u> 日本へ帰国 (機内泊)
8	9/3 (金)	成田着-新千歳	移動

7. 視察結果

◆8月27日(金) 1日目 晴れ

- ・デンマークへ出発のため、今日は羽田空港を經由し成田空港の近くで宿泊する。
- ・ホテルに到着し、これからの視察先のデンマークについてそれぞれその思いを語り始める。みんな、新しい地域、先進的な地域を訪れることによる期待が高まっている。みんなで夕食をとった後、それぞれ部屋で、明日からの視察に身体を休めたところだ。

◆8月28日(土) 2日目 晴れ

- ・すがすがしい気持ちで目が覚める。ホテルの窓からは、まぶしいばかりの太陽が顔を出している。まるで、私たちのデンマーク視察を歓迎しているかのようだ。それぞれホテルで朝食をとり、ロビーに集合。昼頃出発の飛行機に乗るため、成田空港に向かう。

- ・成田空港では、多くの人が海外へ出国する準備を進めている。私たちも搭乗手続きを済ませ、出発ロビーで待機する。12時、予定どおり私たちが搭乗したスカンジナビア航空便は、コペンハーゲンへ飛び立った。今日の天気は快晴。飛行機の揺れもそれほど感じない。コペンハーゲンまでの11時間の空の旅を快適に楽しめそうだ。
- ・コペンハーゲンとの時差はマイナス7時間（冬期は8時間）。日本を28日の12時に出発し、11時間のフライト。時差がマイナス7時間あるので、コペンハーゲン空港には現地時間で午後4時頃到着した。
- ・空港に到着し、最初に驚いたのは、通路の壁面におもちゃのイラストなどを張り出している。さすが、レゴブロックの発祥の地だ。ホテルの各所にも子供の遊び場的な空間を確保している。子供を大切に作る国だと言うことがよく分かる。そして、次に驚いたのが、案内表示だ。日本語も含めた4カ国語でしっかり表記している。これも、観光客に優しい配慮だ。
- ・その後私たちは、入国手続きなどを済ませ、今晚滞在するホテルに移動。チェックインを済ませ、夕食前に軽くホテル周辺を散策する。自転車がとても多いと感じる。それもそのはずだ。環境に配慮し、現在38%の利用率を50%に国を挙げてしようとしているのだ。だから、いたるところに駐輪スペースがある。自転車専用レーンもしっかり確保されている。軽い散策後、軽く夕食をとり、明日から本格的に始まるデンマーク視察についてみんなで語り合う。旅の疲れもあり、夕食もほどほどにベッドに潜り込み、一気に睡魔に犯され深い眠りについた。



▲ 4カ国語標記のコペンハーゲン空港



▲ 自転車普及のため、路上に空気入れを設置

◆ 8月29日（日） 3日目 曇りのち晴れ

【ミドルグロン発電所】

- ・今日の最初の視察先は、ミドルグロン発電所の風力発電施設を視察した。オアソン海峡に20基の風力発電施設が設置されており、コペンハーゲン市内の4%の電力を賄っている。20基のうち、10基は電力会社が設置し、10基は個人出資の協同組合が所有している。
- ・ミドルグロンの風車は、岸から約300mの浅瀬に設置し、海底ケーブルで岸辺に建設した発電施設で各家庭に供給している。この風車は、現在1基あたり2,000kwの出力だが、デンマークとしては、今後は3,500kwへの大型化した風車の建設を予定している。
- ・風力発電の風車は、海鳥などへの影響も問題になっているが、この地域に住む方の話によると、海中においては基礎部分にムール貝などの貝類が付着し魚礁の役割を果たし、海上部分は海鳥の休息

所となっていることから、海上による風力発電については今後も積極的に推進していくとのことだ。

- ・デンマークでは、原子力による発電を禁止しており、風力発電などを含む環境に配慮した電力供給を目指し、風力発電については現在 20%から 50%へ自給力をあげることとしている。また、アオソン海峡を挟む 16 km先にスウェーデンの原子力発電施設があったが、デンマークからの反対の申し入れにより、現在は稼働していない。しかし、スウェーデンとしては、地球温暖化防止対策の一環として、休止した原発を再開する動きがあり、デンマークとしてはこの動きを注視している。
- ・デンマークで、風力発電施設が成長した理由の一つに、庶民のスポーツであるヨットのグラスファイバー製造・加工技術によるところも大きい。また、火力発電などの廃熱を利用することも徹底しており、配管を利用して各家庭に熱エネルギーを供給されている。その廃熱利用を促進させているのは配管の断熱材の技術で、この断熱材についても輸出産業の大きな柱になっており、風力発電施設とともに、デンマークの経済を支えている。



▲デンマークの風車を支えるヨットの技術



▲オアソン海峡に設置された 20 基の風車群



- ◀農地においても、電力会社等により風車が全国に設置されており、農家の土地賃貸収入あるいは電力料金収入となっている。車窓からは、すべての農家に導入されていると感じられた。

◆8月30日（月） 4日目 晴れ

【フォルケホイスコーレ（国民高等教育）】

- ・デンマークでは、憲法によって「すべての児童は義務教育を無料で受ける権利を有する」と定められており、教育費はすべて税金によって賄われ、一部の私立学校を除き、公立高校、大学において教育費が無料となっている。義務教育は 9 年（私学の場合、10 年のところもある）で、義務教育を卒業後は、半数が職業校（工業、商業）、45%が大学進学を目的に上級中等教育へ進み、残り 5%

が就職しているという。デンマークでは、個々の生徒の個性が尊重され、様々な過程での教育を受けることができる。それは、フォルケホイスコーレ（国民高等教育）に象徴される成人教育であり、生涯教育の場や民主主義の学校とも表現されており、19世紀に17歳以上全ての国民が学ぶ権利を有するという趣旨で設置され、その中の「エグモント・ホイスコーレ」を視察した。

- ・全国に約100校あるフォルケホイスコーレの中でも、エグモント・ホイスコーレは健常者と障害者が共に生活をし学ぶ事の出来る学校であり、現在166名の学生のうち56名は何らかの障がいを持っている。障がいを持っていても「すべての活動に参加できる権利を有している」との考えから、健常者と同じ体験ができるように工夫されており、自転車や海上ヨットまで体験できるとのことだ。そして、現在海水を温めたプールの施設を建設中で、この発想は日本から持ってきたという。
- ・今回、校長先生と一緒に日本人の先生である片岡豊さんに対応していただいたが、1997年から学生として日本人も受け入れており、この8月には広島県から仕事を辞めて学びながら施設の介助員として働いている女性にもお会いしたが、日本との交流も盛んで1名の障がいを持つ方と3名の健常者が在学中とのことだ。
- ・ここのエグモント・ホイスコーレの特徴は、障がい者の権利をすべて保障しようとしている点に特色がある。障がい者も寮費（週2万円～月8万円程度）を障害者年金から支払い、健常者は介護や介助を行うことによりその労働対価と学生手当金（5～6万円）とを合わせ、十分な生活を送れる賃金を得ることが、つまり学ぶことと働くことを同時にできる仕組みが至るところで確立しているのである。そのことによって、自立の精神と自立の社会が成り立っている。例えば、出産後の家庭には保健婦が2年間訪問し、孤立化防止のためや子育て支援の仕組みも存在しており、自立に基づく極端な核家族化に対する有用な子育て支援策であると感じたものである。
- ・このように、国民高等学校ホイスコーレは、特色がなければ学生が集まらないことにつながり、各校は、言語、スポーツ、音楽、芸術、家庭参加（サマーキャンプ的なもの）型あるいは、1ヶ月コース、1年コース等様々あり、私たちが訪問したエグモント校は、デンマークでも有名な福祉先進



▲目の瞬きでコミュニケーションする障がい者



▲校長先生と片岡さんからお話しを伺う



▲滞在用バリアフリーのバンガロー

校であり、目の瞬きのみでパソコンを通じてコミュニケーションをどんどん進化させることや就労に向けた支援を徹底するため、本人にとって必要な期間（校長先生曰く、私は 30 年生徒ですと言ったが、障がいを持って勉学をしている最長者は 7 年以上在学しており、本人が必要とする限り）在学するとのことであった。



▲広島から来られた女性(左)からお話しを伺

- 【オーフス大学リサーチセンター・フォーラム】
- ・次に、オーフス大学農業科学部に属する研究開発機関「フォーラム」を視察した。フォーラムは、デンマーク政府が管轄する「国立農業科学研究所」の傘下にある施設の中で最も大きな規模を誇り、畜産および農作物生産に関する研究の大部分がこのセンターにおいて行われている。
 - ・オーフス大学は、1995 年北海道酪農学園大学と学術交流協定を結び、畜産の環境に及ぼす影響や農業資源の循環活用などのテーマで研究を共有している。
 - ・今回私たちは、家畜の糞尿を利用したバイオマスや牛の消化過程の研究などを見せていただいた。このバイオマス関連施設はヨーロッパ 1 の施設を誇り、近郊農業・地域住民約 3,000 戸と地域資源活用の効率・効果的なエコロジカルなバイオガスエネルギー研究を行い、牛や豚、ミンクの糞と飼料作物のトウモロコシと牧草を原料としたサイレージ、商業廃棄物などでメタンガスを生産し、625kw の電気と 825kw の熱エネルギーを発生させ、施設内はもちろん近隣の住宅に供給している。また、牛の胃袋に穴を開け、各飼料の消化率を調査観察したり、餌によるゲップの量を測定したりしている。
 - ・研究を実践するアグリビジネスセンターは、農業生産者と連携を図り、牛の研究でも農民組合との連携で進めている。
 - ・日本から永く研究に携わっている東海大学教員を経た高井久光研究員は、「日本は、高い技術力と優れた品質管理能力があり、ハードな価値感だ。一方、デンマークは、人を中心にした考え方で、



▲ふん尿とサイレージを混ぜバイオガスを発生



▲牛の胃袋に穴を開け飼料の消化率を調査

優れた福祉システムを取り入れ、いわゆるソフトな価値感だ。農業振興のためには、日本とデンマークの価値観を共有し、日本がもう少しソフトな国になるともっとすばらしくなる」との感想を聞かせていただいた。

- ・バイオマスの課題としては、家畜糞尿の発酵を促進するため、トウモロコシや牧草の品質、混合割合を工夫し、メタンガス生産の効率を高めたいとしている。

◆8月31日（火） 5日目 晴れ

【デンマーク農業職業カウシル】

- ・農業王国デンマークを支えているのは、農民組織である。1805年、「農民の社会生活の基盤の整備と強化を目的」に最初の農民同盟が設立され、農民同盟がより生活を安定させるため「農業支援センター」を運営している。
- ・デンマーク農業者の約80%にあたる34,000戸が農業支援センターの本部・支部を構成し、本部の農業政策や試験、研究、指導情報などが支部を通じて環流されており、もちろん、農業支援センターの運営方針は加盟する農家はその役割を担っている。
- ・今日視察したのは、オーフス市郊外にあるディアスライズ支部で、この施設の名称を「デンマーク農業職業カウシル」といい、ブローズデッド・ピータセンさんが対応していただいた。ここでは、農家に対し、税金の申告や経営指導、土地売買（経営交替は親子であっても農地の売買による）の書類作成など、様々な事柄を農民の立場に立ち処理支援している。さらに、肥料の施用状況や、農薬の使用基準などを見直し（単位当たり農薬使用量は、EU内で一番少ない）、最小で最大の効果を上げる実験を農民の圃場を使って行っており、それらの情報を必要な会員に提供している。
- ・この支部（職員70名）の年間収支は、3,700万DKK（約7億円）で、農業者の会費、営農・経営、財務関係の指導料などで運営され、国の支援は2004年に廃止されている。
- ・現在、900戸の農民が一人あたり約80万円ほどの賦課金を負担しながら運営している。賦課金の負担割合は、総販売高、耕作面積、作付作物、飼育頭数などをそれぞれの割合で負担し、相談指導ごとにそれぞれ負担する金額が決まっている。
- ・この地域の農産物収量は、haあたり小麦7.5トン、大麦5.5～6トン、トウモロコシ8トン、牧草7～10トン（4回刈り）と高収穫量であり、この面からも農業支援センターの機能は高いと言える。しかし、WTO協定後はEUの保護政策がなくなり、所得は減少している。



▲デンマーク農業を支える農民組織を視察



▲説明をいただいたピータセンさんと記念撮影

- ・全体的にお話をお聞きし、EU に加盟後、加盟国間の競争が厳しくなり、最近乳価が低下（日本の約半値）し、農民の暮らしぶりは大変な状況だという。WTO や FTA などが影響しているものと考えられ、この課題は世界中どこでも同じと感じたところだ。しかし、デンマークでは、国が農家に 1 ha 当たり 2,200DKK を直接払いしており、一定の生活は守られているとのことであり、日本でもこれから始まる戸別所得補償に期待したいところだ。
- ・なお、デンマークでの農協とは、品目毎の生産、加工、販売組織であり、生産者の経済的利益を第一としており、前記のとおりデンマーク農業政策の屋台骨を構築するのは、農民組織である。
- ・デンマークは、「家畜の福祉」を最初に掲げた国として知られている。そのため、酪農についても放牧を中心とした比較的粗放な資料管理であったが、近年の国際競争により、1 頭当たり生産量も 9,000 kg を超える高乳量となっている。
- ・なお、とわの森三愛学校（江別市）は、1984 年から酪農王国であるデンマークを視察研修しており、交流も盛んに行われている。（平成 21 年度は 22 名が参加。）

【カーロエコロジー農業学校】

- ・午後から視察したのは、農業の担い手を養成している農業学校で、特に有機栽培を目的とした学校である「カーロエコロジー農業学校」を視察してきた。
- ・この学校は 1880 年に、農民の地位向上と民主主義に寄与するために設立。冬は農家の夫を迎えて農業指導し、夏は農家の女性に対し家事や農業に就いて教えていたとのことだ。そして、特にエコロジーに特化した指導を行っており、デンマークで唯一、ヨーロッパでも一番古いエコロジーを教える学校になっている。15 年前、高等学校と国民学校が別々に配置する法律改正により、ここでも農業学校と国民高等学校が併設する施設となっている。
- ・この高等学校で教えている有機栽培は、徐々にではあるが国民に受け入れられ、現在、デンマーク全農地の 6.3% が有機栽培で作物を育てている。有機栽培は自然農法とも言われ、農薬や肥料は一切使わず、動植物と共生し、自然の力を借りながらの農業だという。従って、多くの大規模化の農家が目指す小種類多面積栽培ではなく、多種小面積栽培を行い、リスクの分散を行っている。また、ナタネを栽培し、農場のトラクターの燃料にナタネ油で自給している。
- ・しかし、ここでも小規模農家の経営が厳しいことが指摘され、話を伺った校長先生によれば、「小さな農家がやっていけなくなるとは、本当の福祉国家とは言えない。マチ場に人が集まり、人も金



▲有機栽培を教えるカーロエコロジー農業学校



▲ナタネ油でトラクターの燃料にする

もマチ中心に動く。そして、小規模農家が減り、人が減る。大きな問題だ」との認識が示され、日本における農業も同じ悩みと感じたところだ。

- ・いずれにしても、地球環境と食料自給を基本に、多様な農業を受け入れられる農業を目指していかなければならないと感じたところだ。
- ・ちなみに、1990年農業学校入学者は全国で4,000人いたが、2008年には750人に減少している。

◆9月1日（水） 6日目 晴れ

【デンマークの福祉制度が高福祉・高負担の仕組み】

- ・私たちが迎えてくださったのは、ネストヴェ市議会ケア委員会のジョン・ラオリッテン氏と市広報担当のチーナさんだ。最初に、“なぜデンマークが福祉政策を充実したのか”から伺いました。
- ・デンマークは、1933年（昭和8年）まで非常に貧しい施設があった。そこには老人ばかりではなく若者も入所していた。お金があり裕福な農民は、その中から比較的元気な若者を買取り、家畜同然の厳しい労働につかせた。このような社会環境の中で、社会民主党が政権を取り、1933年に「社会法」が制定され、すべての国民が福祉を受ける権利を有することが法制化された。この法律により福祉国家になる大きな節目の年である。そして、1957年にすべての国民に年金が支給されるようになり、1970年に「社会福祉法」が制定され、これらの制度を統合し、「国民の権利に重きをおく」仕組みが完成した。この制度は、「努力すれば良いことがあり、怠けたら厳しい生活をす」という、いわゆるアメとムチの仕組みである。
- ・私は、このお話をお聞きし、目から鱗が落ちた感じがした。というのも、高福祉になると誰も働かないのではないかとみんなが言うからだ。デンマークでは決してそんなことはない。信頼されるとみんなその信頼に応えようとする。そして必死に働く。高福祉なのだから負担が多いのも当たり前、だから税金の使われ方もきちんとチェックする。政治についても関心が高くなる。ごく当たり前のことが、ごく普通に行われていることに感心する。この考え方は、日本でも十分通用すると感じたところだ。
- ・高福祉は高い税に支えられ、国税で25%、地方税で25%の合計50%が所得から納税し、国民の義務として定着しているのである。国民は、「高福祉があるからそれを支える税を負担する」との考えをしっかり持ち、税の使われ方を議論する政治は、国も地方も最も関心のあるものとなっている。
- ・「EU圏における悩みは、豊かな国に経済困窮の人々が移流入することだ」と、通訳者の皆さんはそのことに触れるが、デンマークの人々と話しをすると、「教育を充実させ、納税者になってもらえば、豊かな国になる」と、実におおらかに構え、常に物事を良い方向へと持っていく国民性につくづく感心したものである。



▲全員が勉強し質問した視察団は初めてだとジョークを含めて言われる

◆9月2日（木） 7日目 晴れ

【国民学校の評議会】

- ・今回のデンマークでの最後の視察は、学校“AMAGER FAELLED SCHOOL”である。
- ・デンマークの学校運営については、個々の児童・生徒の能力や個性、嗜好に合わせた指導を行っており、今日視察した学校では、「自立」、「自己批判」、「民主主義社会の一員」ということに重きをおいて指導している。そして、学校側と保護者との深い信頼関係で学校運営を進めており、この信頼関係こそ、学校運営ではとても大切だと話されていた。
- ・そして、その学校運営については、国の基本的方針はあるものの、保護者と教職員、生徒会などの代表による「運営委員会」で教職員などの人事を含む様々な事柄が決められている。視察した学校では、保護者代表5名、教職員代表2名、生徒会代表2名の9名の運営委員で構成され、それぞれの委員は、民主的な選挙で選ばれている。委員会の運営についても、多数決による採決は極力行わず、それぞれが理解できるまで話し合いを行うという徹底ぶりだ。生徒会についても、2名の役員だけで決められないときは、議論を持ち帰り、みんなで話し合うとのことだ。だから、生徒たちも自主性を持ち、早い段階から自立に向けた訓練をされているのである。
- ・また、市や国についても、学校運営委員会で決めたことをできるだけ尊重し、政策決定時には、子供たちの意見もしっかり取り入れるとのことだ。
- ・デンマークの学校を視察させていただき、子供たちの目の輝きが美しいことに気がついた。人なつっこく、私たちを中国人と思ったのか「ニイハオ」と歓迎し、こちらで「こんにちわ」と声をかけると「コンニチワ」と応えてくれた。テストと成績で追い詰められる日本の教育と個を大切にし、自立と社会参加の重要性を教えるデンマークの教育。個を大切にする教育だからこそ、美しい目の輝きをしているのだと感じたところだ。
- ・社会保障制度と教育水準では、先進国と言われているデンマーク教育。「特に子どもを中心とした教育実践をしっかり北海道の教育に生かしたい」「特に学力向上策によって序列化が進み、特定の子どもが排除されつつある北海道の教育システムとは対極的とも言える教育現場での子ども達の目の輝き」「いきいきと元気で活動しているか」など、「子どもの姿をしっかり見たい」そんな想いでデンマークの教育を視察先に選んだ。
- ・今、日本は教育手法の転換が必要だ。子どもの権利条約によって子どもの意見の尊重及び参加が権利として位置づけられているが、その保障が十分になされていない状況にあり、この権利をいかに保障するか、子どもがこの権利を行使できるように、いかに支援していくかが課題と考え、そのシステムをどう作るかを学びたいとの想いで出発した。
- ・子どもの学校現場への参加実践、学校運営についての保護者の参加、教育委員会の役割など、共に学び、支え、信頼し合いながらの大切さを改めて問い直したいとも思った。
- ・生徒代表（生徒会の会長と副会長）の2名に、「特に、生徒が求め実現したのを知りたい」と尋ねたところ、「それは、ランチ（給食）を出してほしいと求め、それが実現したことだ」と、口をそろえて応えられたことが印象深く残っている。それは、この学校は、移住民が約半数を含め、経済困窮家族が多く、ランチタイムも特に設けていなかったことから、昼抜きの生徒が存在する問題を解決したのだ。
- ・また、多民族、多宗教の学校を考えたとき、「豚肉や牛肉についても、保護者のメニューに対する反対があるのでは？」と聞いたところ、「生徒の思いを無にしていけない」との立場を全ての評議員が持ち合い、メニューは栄養士が決定すると、それを尊重すべきと結論を出したという。「そ

これは、子どもたちを守るために栄養士を守るということです」と、決意を皆さんが語ったことに感動さえ覚えたものだ。ちなみに、豊かな地域の教育に係わる予算は、この学校の半分ほどであり、画一的な予算配分は全くしていないとのことであり、これが教育の原点と感じたところだ。

- ・デンマークでは、大人同士が互いに尊敬しあうことが子どもたちに良い習慣を招くとして、それぞれの学校が個の尊重、価値観を理解させる教育を重視し、生徒をどう支えてサポートしていくかが教師の仕事とされている。
- ・子どもたちひとり一人を社会全体でしっかりと受け止め、学校が単に学力向上、教育が点数獲得だけに目を向けるのではなく、しっかりと教師に現場裁量権を保障すると共に、個人の能力差をしっかりと認め合い、教育のあり方や学校の決定過程に生徒会の代表を参加させてしっかりと意見を述べることも保障されるなど、まさに子どもの参加する権利、意見を表明する権利など、真に子どもの自立を促す対策がしっかりと確立されていることに感銘を受けた。
- ・学校は、自分たちで作り出すことができるんだと言う、子どもたちの自信に満ちあふれた表情。そしていきいきと澄んだ目が本当に印象的だった。
- ・今一度、現在の日本の教育、また文科省追随型の北海道の教育を根本から問い直し、子どもとの向き合い方を保護及び指導から権利保障及び支援へと、教育のあり方を変更し、進学競争や学力テストなどの数値で競い合わせる詰め込み教育から、ゆとりへと子どもたちを解放させなければならぬと感じたところだ。



▲学校運営委員会の状況をお聞きする



▲生徒会で要望したランチを一緒にいただく



▲就学前児童の指導風景



▲目の輝きが生き生きしている子どもたち

8. 雑感

・デンマークでは、会社のランチは 15 分程度で、学校（全寮制の国民高等学校を除く）では設けていないのが一般的である。保育制度や学童保育（3 年生まで）は充実しているが、5 時までの預かりとなっている。私たちの常識では、勤務時間内での送迎は困難と考えるのであるが、デンマークでは合理的話し合いの中で、工場では作業時間を早め、目標をクリアした段階で切り上げ、会社ではランチ時間を切り詰め集中的に仕事をするにより、午後 3 時半位には帰路につくのである。実に不思議な感覚に陥ったものであるが、民主主義とは“誰かが提案し、どこかで始まり、皆がそれが良いと、決まっていくことなんだ”と考えさせられた事柄であった。

・セブンイレブンが、日本とおなじみのネオンサインで私たちが宿泊をしたホテルの周辺で必ず 2~3 軒 24 時間営業していた。他の EU 圏内では見かけない（ドイツでは土曜日の午後 3 時以降と日曜日の買い物は駅構内のキオスク程度しかできない）光景で驚いたが、法律の網をすり抜け（売上げが約 1 億円以下で、個人営業であれば可能）日本のコンビニと同様な機能を果たしているとのことで、驚きであった。

